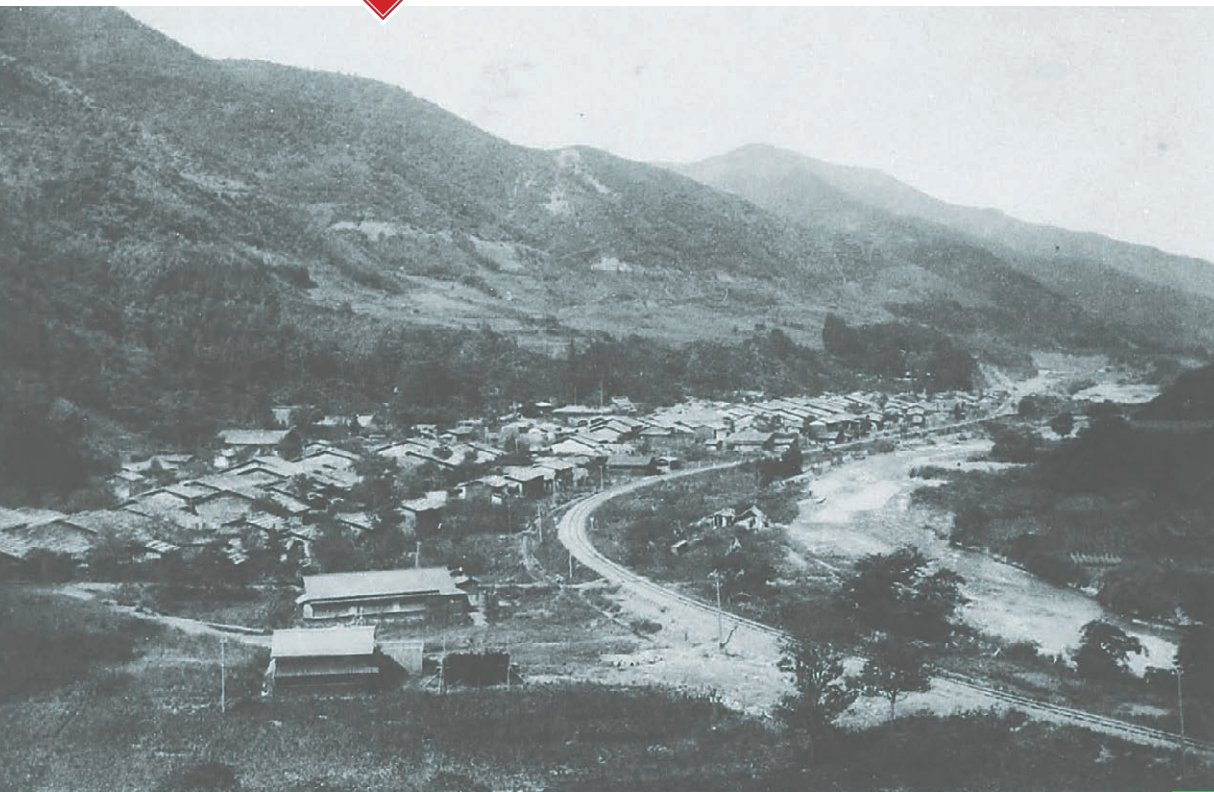


歴史資料から知る過去の林野利用



a



b

写真1 現在と過去の山の景観の違い(長野県塩尻市奈良井)

明治期には集落(奈良井宿)の山側に草地が広がっていた。

現在はその草地は全て森林(主にカラマツ)となっている。

a) 明治43(1910)年刊『木曾の錦一写真百景』坂野悦治郎撮影より。

b) 平成24(2012)年4月28日撮影。

「日本は世界有数の森の国である」と聞くと、その通りだとうなずく人がほとんどでしょう。現在、森林は日本の国土面積の7割ほどを占めています。実際に山に目を向けてみても、その山肌は多くの木々に覆われています。このため、日本が森の国であるのは当然のように感じられます。それでは、江戸時代には集落周辺の山の5割以上が草地だった、と聞くと、どうでしょうか。現在の状況から考えると、にわかには信じられないかもしれません。しかし、江戸時代以降の林野利用の変遷を紐解いてみると、過去に草地が広く分布していたことは確かであり、ほんの半世紀前までそうした景観が続いていたのです。では、写真1のような現在と過去の景観の違いは何によってもたらされたのでしょうか。

その答えは、私たちの暮らしが過去とは変わったことにあります。現在の暮らしは化石資源に強く依存し、多くのものを海外から輸入して成り立っています。一方、かつての暮らしは、衣食住のほとんどを植物資源に依存していました。鎖国政策の中、人口が急増した江戸時代には、植物資源は限界に近いところまで利用されました。城や城下町の建設のために森林は伐採されました。また、増えた人口を支える食糧を増産するため、農地は拡大され、農地の肥料とな

る草や灌木を得るための草地も拡大されました。江戸時代初期の時点で集落周辺の山の3〜7割が草山となっていたようです(写真2)。明治時代になると、化学肥料の使用増加、野焼きの抑制などにより、草山への植林が進みました。一方、近代化を目指す殖産興業政策により、土木・建築・燃料用材として森林は次々と伐採されました。つまり、地目が山林に区分された地域に無立木地や新植地といった草原的な景観が広がったのです。その後の度重なる戦争、第二次世界大戦後の復興期まで、林野は過剰に利用され続けました。過剰な利用は、森林や草地の裸地化を引き起こしました。裸地は土砂災害の発生要因となったため、江戸時代には幕府や藩が、明治時代以降は

政府が主体となって、資源の利用抑制や植林などの対策を取りました。こうして、山には人の利用の仕方に従って、森林、草地、裸地という多様な環境が作り出されたのです。

一方、画一的とも見える木々に覆われた現在の山の景観は、過去とは逆に人が植物資源を使わないことで作り出されています。生物多様性に富み、災害の起きにくい山を作っていくために、先人たちの経験を踏まえた上で、適度に草地や裸地が混ざった多様な環境から構成される森林へと誘導する方法を考えなくてはいけない時期に来ているのではないのでしょうか。



写真2 正保の信濃国絵図(上田市立博物館蔵)の松本城付近(現在の長野県松本市) 正保四(1647)年に幕府に提出された国絵図の写しと考えられている。写真の下部の四角は松本城を示している。薄墨で着色された山は草山、柴山と考えられる。森林を示す記号は社寺の周辺に描かれる。国絵図と同時に作成された郷帳には、松本城周辺の山持ち村の多くが草山、柴山と記載されている。